

入ソ日 昭和二十年九月一日

抑留地 ザバイカル州ハラグーン

作業 伐採

引揚 昭和二十三年六月十八日

引揚船 恵山丸

上陸地 舞鶴

(神奈川県 片山 正二)

終戦前後と抑留秘話

島根県 松浦 進

興安嶺山麓の攻防

満蒙の守備

南方では米軍の猛攻で熾烈な戦いが続き、沖縄本島の陥落が決定的となった昭和二十年六月・安部孝一中将の率いる満州一〇七師団一万三千余名は、阿爾山地区を守備増強するため哈爾濱を出発して五叉溝に移駐した。

この地は大興安嶺の険しい山並が連なり、裾野は荒漠とした大草原で遠く外蒙に達し野獣が出没する辺境であった。

戦史によると、ハロンアルシャンは温泉湧出し、此処に僅かな駐屯隊が孤立配備され北方海拉爾から南方熱河地区に至る広大な間隙には一兵の配置も無かった」と記述されており、ソ連兵による国境侵犯が頻発し双方の小競合いが続いていた。

師団將兵は暮舎生活を営み、連日陣地構築を急いでいた。私は歩兵一七八連隊（二〇九部隊）兵器室に所属し、十数名の技術隊員と測量器材を担いで山越え谷を渡って標高測点を設置することが日課で、山頂の要害では強者達が炎天のもとで汗と埃にまみれて岩肌の堀削に励んでいた。

しかし満ソ国境は日毎に風雲急を告げており予断を許さない緊迫した状況であった。

ソ連軍参戦

八月九日未明・静間を破る飛行音で眼を覚し舎外に飛び出て見ると、赤星印を着けた偵察機が低空を二・

三度旋回して去った。

程なく非常呼集のラッパが鳴り響き、全軍直ちに戦闘準備態勢”が発令された。

私は指揮班に編入され輜重行李を伴って弾薬庫に急行したが、支給業務が混雑し待機していたとき、突如西方の稜線からソ連空軍の大編隊が現われ、基地に襲いかかり猛爆撃を加え、施設は忽ち破壊炎上し黒煙に覆われた。また国境方面でも股々たる砲声が連山にこたましており、殺気立った重苦しい雰囲気に包まれた。

漸く実弾と爆薬を受取ったものの在庫量が乏しく、請求した半分にも満たず口惜しさと不安な心境で箱に納め帰途についた。伯朴沿線の街道は夥しい避難民や家財を満載した車馬で溢れ、進路を阻まれながら帰隊しそれぞれに支給を済したのは既に夕刻であった。

日ソ不可侵条約を一方的に破棄して進攻したソ連軍は、緒戦の急襲で制空権を握り、地上でも優勢な機甲軍団が怒濤の如く国境を突破し接近中との情報を知らされ、武者震いか、恐怖か、言い知れぬ気持となった。

難波した退却修羅場

八月十一日、陣地死守から一転して、新京へ後退せよ”四十四軍本郷司令官から暗号電文が届いた、これを最後に十八日後の停戦伝達まで関東東軍の情勢は全く判らず五里霧中の状態が続いた。

急変した中での諸隊集結は乱舞する敵機に悩まされ困難を極め、七百キロの退却行軍も遅々として進まず、われわれは唯一機動力と頼む軍用トラック（木炭車）二台で、五叉溝の基地に残っていた弾薬や食糧の補給を続けた。たまたま輸送途中の草むらに空から撒かれたと思われる紙片が散乱しており拾って読んだ。

・宣伝ビラの内容

勇敢なる日本軍将兵に告ぐ

今や日本帝国の敗北は決定的となり、今次大戦も終ろうとしている。諸君は無益な交戦を速やかに止め武器を捨てソ連軍に投降せよ、一日も早く父母妻子の待つ祖国に帰還することを勧告する。

一九四五年八月十日

ソ連軍極東軍総司令官

ワシレフスキー元帥

これを見て「虜囚の恥かしめを受けず、生きて帰るな」戦陣訓を思い出し敵の謀略と決め破って捨てた。

昼間は林の中で姿を隠し暗くなつて行動し八月十三日払暁、やっと西口谷地に辿り着いた。しかし敵はすでに退路に進出し、先遣の輜重隊は全滅した模様で早くも難関につき当たった。日本軍は活路を求めて決戦を挑み山麓一体は壮絶な修羅場となった。

指揮班長から「ソ連軍機械化部隊の配備状況と特殊兵器の性能を偵察せよ」と命じられ、数名の隊員と敵地に穩密接近した。彼等の進攻戦術は後方で強力なカチューシャ砲が援護射撃を行ない、先頭を教台の装甲車が低速の重戦車群を誘導しながら走り、これを盾とした散兵が友軍の挺身肉迫攻撃を警戒し慎重に続いていた。

近くの草原で連続の爆発音がし、木陰から見ると遠隔操作の無人自走砲が親子爆弾を放ち誘発させ焦土作戦を行ない、また、遠望すると山道では物資を満載した大型トラック（米国製）が大樹にロープを結び装着ウインチで自力登坂しており、彼我の近代装備の違い

を感じた。

敵しい攻防戦は三日二晩続いたが、新手を繰り出す敵の戦力は衰えを見せず、挺身奇襲で立ち向かい悪戦苦闘する友軍は、弾丸残り少なく補給の望みも絶え、八月十五日・天命を迎えた。

戦場は深い濃霧に覆われ、視界極めて困難に乗じて山頂の指令所から打ち上げられた赤吊星を合図に敵陣に総攻撃を敢行した。しかし不幸にも作戦参謀や部隊長など多くの戦死者を出し、加えて半島出身兵で戦場離脱するなど各隊は統制を失いつつあり、もはや劣勢挽回の策も無く絶望的となった。

深山へ逃避行

最悪の事態となり安部師団長は「全軍興安嶺の奥地に待避を決断」堀尾茂光部隊長（二〇九部隊）は「日没を待って小集団に分散して北方ハマコーザ方面を目指して行動を開始せよ」と指令した。

折からの豪雨降りしきる泥濘の中を、溪谷に沿って人馬もろとも兵器車輛を背負って深山幽谷に潜入した。後方の修羅場では夜空を照らす曳光弾や砲声が聞え、

未だ戦闘が続いていた。われわれ兵器隊員は敵が遠ざかったことを確め、夜の帷りの窪地に達し僅かな携行缶詰を口にし野宿した。

八月十六日、高山の朝は早く明けた、身支度を整えて再び地図と羅針を頼りに難行苦行し修験道を北に歩いた。途中で満服を纏った無一物の不思議な人に出合い尋ねた。彼は「海拉爾の警官でソ連兵と戦い一人で逃げるところだ、道案内するから一緒にしてくれ」と頼まれ訛から半島人と察した。重荷と思つたが相身互いと同情し二日ほど寝食を共に行動したものの言動に不審を感じ注意して見張つた。果せるかな彼も気付いたらしく深夜に姿をくらました、やはり敵の密偵の疑いを深めた。

真夏の山中は昼と夜の温度が著しく変わる気象に悩まされ、五・六日ほど経ち辺りが急に明るく開けパオ（蒙古住居）が点在する人里に出た。目指すハマコーが集落だ、破れた軍衣脚絆にすり減つた編上靴を引き摺つた落武者達が三々五々集まってきた。現地の人達は農耕や牧畜の自給自足で密やかに暮していたが大変

好意的に接してくれた。

我々は清流で垢を落し、魚を獲ったりした。開戦以來過酷な苦しみを体験した者にとって、此処で過した数日は、自由と平和で憩いの別天地の思いだった。しかしこの気儘な生活も束の間で八月二十四日、堀尾大佐以下千五百余名（開戦時二千五百名）は再び東進を開始し、コテネロ地区に集結していた師団主力と合流した。

命の恩人

関東軍事司令部と何等連絡する手段のないさ迷える悲劇の兵団八千余名は、八月二十五日、首都新京を目指し一千キロの長旅を始めた。中継地の王爺廟（興安）へ向け南下したが、またもや敵は察知し号什台に待構え行手を阻んだ。

山砲、追撃砲を主とした山岳戦は、終日展開し薄暮せまるころ砲声は止み、敵は四散した模様である。

前線補給していた十数名は川のはとりで休んだ。そのとき対岸の繁みから自動小銃を乱射され応戦し数名のソ連兵が遁走した。幸い最悪の損害は無かったが、

私は驚いた軍馬に右足踵を蹴られた。急ぎ本隊に戻り報告したものの、責任者として浅はかな判断と不注意を後悔した。

日暮れとなり山を切り拓いた敵中街道を強行突破し、將兵達は先を争うように進んだ。途中には多数の死傷者が無惨に見捨てられており、敵の幌馬車が横転し蒙古模様の女靴や衣類も散乱していた。

先頭集団にいた私は峠の中腹にさしかかったころ傷ついた足の痛みが激しくなり、最後尾を一人トボトボと歩き遂に力尽き陥まってしまった。友軍の靴音は遠くに消え深山は闇に閉ざれ静まり返った。耳を澄ますとソ連兵の話しや合図の信号弾もあがり、心細さと鬼気に襲われ、もう駄目か、今生の終りか、いや死にたく無い。生と死の瀬戸際だったそのとき、坂道を登る特有の蹄音が近づいた。蒙古馬だ、咄嗟に手摺弾を握り抜刀して見構えた、目の前で騎馬が停った。「友軍ではないか」夜空に透して見上げると、同じ部隊本部の金高主計軍曹の勇姿だ。"地獄で会った仏"の響えだ。私「俺だ、本隊はこの先に行った。歩けない、もう

駄目だ」彼は馬を降りた。

彼「近くに未だ敵がいます危ないです、早く馬に乗って下さい」

と促し、不自由な私を介護して小さい馬に乗せ、首筋につかまり、峠を一目散に駆けおり朝霞と炊煙にかすむ平原で休止中の本隊に追いつき窮地を脱した。

玉碎急転して停戦

大勢の戦友を興安嶺の山中で失い、深い悲しみと失意の退却を続け八月二十八日、音徳爾に着いた。

此処は遙か西方の峰伝いに成吉思汗遺跡を望む高原の町で公署もあり物資集散地として栄えていたが、戦火を知り人影は無く家畜だけが右往左往し、各隊は分散して宿営した。

乗馬隊が満人に変装して進路を偵察し伝えたところでは、"伯杜線沿いにソ連軍が進駐しており、王爺廟は寝返った満軍が警備し住民は赤旗を振って歓迎していた、また敵大部隊は我が師団に接近中である"

絶体絶命に追いこまれ安部師団長は「明二十九日、敵陣を夜襲し最後の突撃・玉碎」を伝えた。

決戦の朝は空一面に晴れ渡り、秋の涼風が草原台地になびいていた。誰の顔も蒼度胸か悲愴感は見られず、あちこちで車座となつて別離の宴を開いていた。

隣りで物騒な気配がし振り向くと、背中に入れ墨した酩酊男が刀を振り「俺は関東で知られた親分だ、入隊以来苦しめた若僧の見習士官と果し合つて死ぬ」とわめき散らしていたが、屈強の下士官が素早く捕え、近くの木陰に連行し隊長らしい人と処刑埋葬して手を合せて拜んでいた。思えば敵前騒乱の痛ましい出来事であった。

昼ごろ紺碧の空に開戦以来初めて日章鮮やかなプロペラ機が飛来した。地上では待望の救援とばかり歓声をあげた。まもなく飛行機は大きく翼を振ってビラを撒いた。

命令

関東軍司令官 陸軍大将 山田乙三

日本国と連合国はポツダム協定に基づき昭和二十年八月十五日以降戦争を集結した。よつて貴師団も直ちに停戦し、ソ連軍の武装解除に応じ指示に従ふべし。

この命令文を見て戦争渦中で翻弄された異状心理のため「敵の謀略に乗るな、打ち落せ」と叫んで対空射撃する者もいたが、飛行機は怯まず草原に強行着陸し、機内から日ソ両軍の参謀が飛び降り安部師団長と会見し、全將兵を集め終戦紹書を伝達し直ちに停戦・武装解除を受諾したことを布告した。

堀尾大佐は二〇九部隊員と民家の中庭で軍旗奉焼し、最後の訓辞を行い万感胸に迫り皆男泣きした。

日本軍使は白旗を掲げ急速敵地に赴き、時を移さず我に数倍するソ連軍が四方からトラックで突進し、日本軍全員を一か所に集め、武器弾薬を地面に置かせ素早く後退させた。口惜しさと安堵感でただ呆然と見守つた。

斯くして最後まで戦つた西方関東軍の幕降しを演じ敵の軍門に降つた。

シベリア抑留四年

哀れ虜囚の旅

激戦と彷徨に明け暮れ、今は悄然として沈黙し、毛布にくるんだ荷物を背負つた丸腰のみすぼらしい姿の

拘束集団は、マンドリン銃を肩から吊して護送するソ連兵に身をまかせ、重い足取りで鉄路に向かって歩き続けた。

北満の晩秋は夜の冷えこみが厳しく、僚友と互いに肩を寄せ合って野宿し、枕もとで鳴く虫の音が郷愁を誘い慰めてくれた。

途中の野原や河辺に屯ろしていたソ連兵が我々を見つけると、脱兎の如く近寄りピストル片手に時計や万年筆などを強引に剥ぎ取った。

私に「その前歯の金冠をよこせ」と言ったが外せず諦めて去った。正に飢えた野獣の生感を思わせる残忍さであった。

祖国帰還のみを夢見て長い道のりを屈辱と迫害に堪えて十月中頃、齊々哈爾の旧軍兵舎に喘ぎながら着いた。到着集団と出発する同胞で混雑しており、ソ連側の指図で日本人通訳や係が処理していた。彼らは破れ軍服に黒く汚れた我々を烏部隊と呼んでいた。戦わずして終戦を知った君達には、この苦しみは判らぬだろう。自問自答して諦めるしかなかった。

久しぶりの入浴・衣替や藁布団の感触に耽り、一週間ほど滞在して待望の出発の番が来た。さては帰国かと胸が弾んだのも束の間で、通訳が十八作業隊の編成と行先を説明した「現在朝鮮半島は内乱で輸送できない、日本海も浮遊機雷で航行危険だ。よって来春の雪解けまでシベリアで暮らすことが決った」またもや運命の徒らか、この言葉が長い抑留の憂き目の門出となるとは思ひもしなかった。

千名の隊員は待機していた有蓋貨車に詰め込まれ、西へ走り十一月三日、国境の町満州里を過ぎた。殺風景な雪原を小窓から眺め、そのうち小さな駅で全員下車させられた。後日ハラグンという寒村であると知った。

シベリアは氷点下二十度以下で、想像を絶し、膝まで没する雪をかき分け人里遠く離れた自然林の中で隊列が停った。辺りを見廻すと有刺鉄線柵の四隅に望楼があり、他に建物は見当らない。ソ連軍護送官が「お前達の越冬地は此処だ、収容所を建てて住め」勝ち誇ったように言った。覚悟はしていたが、急に全身の

力が抜け雪の上に背負った荷物を投げ出し、ただ茫然自失の状態だった。

この世の地獄収容所

吹き荒ぶ風雪は原始林に鳴動しており、雪を掘っての野宿は凜烈肌を刺し、白く凍てついた髭面は幻想的だった。

住い造りは深さ一・五メートルの凍土を解かしツルハシで掘り、昼夜連続の突貫作業が三週間ほどで、百五十名入れる半地下丸太組小屋が教棟完成し、どうにか嵐を遮ることができた。

十二月中ごろソ連当局から「働かざる者食うべからず」との鉄則を通告され、恐るべき重労働が始まった。

朝六時警戒兵の自動小銃とベストラ（速く）に追い立てられて雪山を登り、三人一組となって馴れぬ手付で大木を伐採・集積した。

夕刻巡回する検収員が計測し、八立方米のノルマ（割当量）を達成するまでは下山を許さない厳しいものであった。過酷な労働に加え食事は生命維持の最低限界量で、毎日の献立量は

朝 凍った黒パン一塊と菜っ葉の塩汁を飯盒一杯
分

昼 米か粟の重湯を飯盒三分の一づつ分けて飲む

夜 米か高粱の飯を飯盒八分目と親指大の肉か馬

鈴薯の煮付三、四個

栄養失調と疲労困憊はその極に達し、顔は焚火の煤で真黒く、眼は鋭く光り無言の表情は生ける屍であった。

不幸に枯れ木の折れる如く凍土に骨を埋め、故ナニナニの墓、茶毘の木炭で書かれた墓標は、日毎に増え、翌二十一年三月までに三百余柱の尊い犠牲者を出した。

我々を苦しめた警戒兵で悪業の首謀者ユダヤのペレデンスキ（以下「P」という）という兵士がいた。彼は日本人食糧庫（一か月分）から係を脅しパン・肉・砂糖を横領しては村の若い女達に貢いでいた。またある晩P兵士が持物検査を口実に侵入し、調べ、紐で結んだ木箱を見つけた。

P 「これは何か」

私 「亡くなった友の遺骨で、帰国して家族に届け

霊を弔う大切な品だ」

P 「ソ連にはそんな風習は無い、古い考えだ捨ててしまえ」

私 「お前には人間の血が流れているのか」憤激しながら高ぶる心を抑えていた。

しかし遺品もろとも強引に持ち去った、革命以来宗教を否定した思想と教育の怖さを感じた。

二十一年寒さも和らいだころ、抑留者の実態調査に数人のゲーペーウー（秘密警察）が来て所長立会いで状況を聞かれた。

ゲ 「此処での日本人死亡者が多いのは何故か」

私 「ソ連警戒兵達の悪辣な食糧略奪だ」

即座にP達を名指しで非難し、その日のうちに悪徳者は何処かに連行され、投獄されたと聞き安堵した。以来待遇も改善され体力も徐々に取り戻した。

蒸気風呂とオーロラ

二十一年雪も解け始め、やっと苦難を脱したころ待望の風呂場が川の近くにできた。三坪ほどの山小屋で、片隅に炉を築き、焚火で熱した鉄板蓋に水を掛け蒸気

を発生させて、体を温め汗を拭き取る変った施設だ。

初めは馴染めなかったが慣れたら心地良かった。

ある晩、風呂の帰り道で冷えきった夜空が急に明るくなり、辺りの山や谷の景色がはつきりと見え、幅広い明暗の波状が次々と移動し徐々に消え再び暗夜に返った。約一時間ほど雄大なスクリーンに映し出された風景を見た思いで、数年に一度発生するオーロラ（北極光）の偉観であった。

ウラル山脈を越えて

雪と氷に閉ざされていたシベリアにも、遅い春の息吹きを感じた二十一年五月、ソ連側から「今日午後当地を出発する準備せよ」と言われ行き先を尋ねた。「ダモイ東京、東京に帰るだろう」との返事で皆喜んだ。

しかし、悲運にも異国の凍土で眠る戦友の遺骨も遺品も携えず後髪を引かれる辛い思いで地獄山を後にし、見覚えのあるハラグン駅から再び貨車に乗った。

列車が動き東へ向かうと思いきや非情にも西へ速度を速め、またもや騙されたか！「誰の顔も曇って来たが、もうどうにでもなれと諦めるしかなかった。

途中イルクーツク駅で降り、シラミ駆除と入浴のため大通りを警戒兵に護られ歩かされた。大勢の市民が集って来た。「今次大戦で庄勝誇示の狙いか」と考えていたとき、突然群衆の中から隻脚の老人が飛び出し、松葉杖を振りあげ凄惨な形相で「俺がこのような片輪になったのは日露戦争のときだ、一人息子も満州ノモンハンで死んだ、日本人の恨みを忘れることができない」とよろめき叫んでいた。警戒兵が盛んに宥めていた。極東ノ連領に過去の悲惨な歴史の傷跡を目撃し、不幸な世に生きた身の相憐みで胸が詰った。

さすが都會の浴場は整っていた。浴槽は無いが、ちょうど原始人が文明の恩恵を授かった気分で心身爽快になった。

再び貨車の蚕棚に体を横たえ、広く長いバイカル湖畔を揺られ、ウラル山系を軋みながら越え明るく拓けた中央アジア平原の本線から支線に入り北の方向に進路を変えた。

白夜の道草

もうこの地帯はシベリアのような大森林は無く、見

慣れぬ北欧の風景に見とれていると、列車は名も知らぬ場所ですまじり全員荷物を持って降された。見渡すが人影も住居も疎らで辺鄙な地と察した。

護送するノ連兵は小人数で寛容な態度で接し、近くの樹林に導いた。此処でも建物らしいものは無く、皆で携行天幕を継ぎ合せ枝葉を敷いて寝起きした。幸い雨が少なく助かった。

北国の六・七月は毎日が白夜だった。太陽は終日頭上を廻り午後十一時ごろ北西の山に沈み翌朝三時ごろ北東の丘から姿を出す、北の空は夕焼と朝焼が連続し、地上は闇夜が無く薄明るく神秘的な宇宙現象を見た。

日常生活や労働などは全て我々の自主運営に任せ約一・五か月過ぎし、再び来た本線中継駅ベルミに到着し列車の入れ替えに数日車中滞在した。

考えることは、これからの行先が一番の関心であった。走り出すと南西方面らしいと気付いたが、今は運を天に任せ悟った気持で動揺もせずヨーロッパ平原を旅した。

起死回生の収容所

初冬の気配を感じた昭和二十一年十月ごろ、首都モスクワの東二百キロの中部ヨーロッパの中心都市ウフアに到着した。

市街は独ソ戦で各所が壊され激戦の跡が生々しく残っていた。我々が移り住んだ建物は厳戒の収容所では無く、普通の集会所を改造し医務室や休養室も備え電気・水道・ベチカ暖房もあって、丁度文明社会に戻って来たようだった。また防寒衣服・帽子・長靴も渡され服装だけはアジア系ソビエト人に変貌した。

此処での労働は戦後復興の建築現場で、老人や女性達と一緒に作業した。現地の人達の感情はゲルマン人（独乙）には敵愾心を持っていたが、日本は遠い国であまり関心がなく、むしろ同情的に思えた。ソ連当局も日本人の勤勉さと実直を認め、歳月が経つにつれ警護も緩やかとなり、思想的なことも干渉せず相互理解と信頼の絆が深まった。

我々の健康も目立って回復し、夕食後には自慢の民謡や落語・講談で旅愁を癒やす余裕も出た。一緒に

手を携え祖国の土を踏むまでは頑張ろう”の合言葉で助け合い励ました。

二十三年秋、穀倉地のコルホーズ（集団農場）で馬鈴薯の収穫作業をして帰り支度で休んでいたとき、スラブ系の老人が奇妙な顔つきで尋ねた。

老人 「君達は何処から来た人達か、蒙古かキリギースか、それとも朝鮮か」

私 「違う、俺達は日本人だ」

老人 「それではゲルマン（独）と手を結んでソ連と戦ったあの国か、それでは君達は捕虜か」

私 「そうだ」暫く考えていたが、急に親近感を現わした。

老人 「私は日本に行ったことがある、家はあそこだ、遊びに来い」

数日経ち、好奇心もあり同僚を伴い農夫宅を訪れた。庭先には鶏や牛が飼われ長閑な佇まいだ。老婆に来意を告げたら老人が出て座敷に招じ、栗の焼餅、バター、芋キントンや牛乳を出されご馳走になった。

彼の述懐では、若い頃船員で函館や横浜に寄港し、日本の景色が美しく人々は親切で酒が旨かった等語つてくれた。

老人 「貴方達の父母は健在か、便りはあるか、食物はどうか」

「私の体も独ソ戦に征つたまま帰って来ない、多分戦死したろう」

大粒の涙をとめどもなく流していた。国境と民族を越えた素朴で温かい人間愛に触れ、罪深い戦禍の悲劇をここでも見聞し、平和の到来を祈った。

二十四年七月、ボルガ河畔に夏草生い茂るころ、今度は待ち遠しかった祖国帰還が実現した。

四年の歳月異国でさまざまな苦難に耐え生き抜いた想いを抱く抑留者を乗せた機関車は、今までの苦勞を吐き出せとばかり黒煙を残して東へとひた走った。

バイカル湖畔を過ぎ目を凝らしていた友が、「此処はハラグンだ、見ろ、あの山奥に戦友の火の玉が見える」大声で叫んだ。皆一斉に外に視線をやると、確かに夜の帷に赤い炎が見えた。全員正座して頭を垂れ、

「終焉の地に眠る同胞のみ靈安かれ」と祈った。

ハバロフスク駅を過ぎた辺から引揚列車は十五輛ほどの大編成となり、唸りをあげてナホトカ港に向け南下した。

暗黒社会を覗く

密告の統治国家

多民族国家のソ連邦では反国家的思想犯の刑罰が最も重く、続いて放火―殺人―窃盜の順で裁かれると聞いた。しかもゲーペーウー（秘密警察）が住民を厳しく監視しており、密告による検挙を最も恐れていた。

我々がシベリアからヨーロッパへ移送途中に擦れ違った貨物列車を見て驚いた。貨車の天蓋上に数丁の機関銃と探照灯を据え付け、警官が交替で見張っており、鉄格子の小窓から女・子供・老人達が淋しそうに見ていた。タタール生まれの警戒兵に理由を聞いた。

兵 「あの人達はウクライナ地方の人種で、思想犯

として部落親族全員シベリア矯正收容所に送られるところだ、可哀相に國も行き過ぎだ」と言った。

また、ウファ市の現場監督は初老年配で物分りもよく気心も知り雑談する仲だった。或る日

私「スターリンの肖像画があちこちに掲げてあるが、そんなに尊敬しているのか」とほけて尋ねると、一瞬驚いた表情で首をすくめ、指を格子に組み（営倉のことを示すセスチャ）頭を横に振り、

彼「その話のご法度だ、夫婦の間でもだ、ゲー

ペーウーが直ぐ来て捕える、怖いよ、昔のツアー時代が懐かしい」

とつぶやいて話を打ち消した。まさしく恐怖政治の裏側を垣間見た気がした。

過酷な錠

北国白夜の許を歩いていたとき、前方からビービー笛を鳴らし土煙をあげて近づく集団に出合った。よく見ると、着剣した銃を小脇にした警官が五十人程の囚人を前後左右から護り、互いの足首は鉄鎖で繋がれ曳きずっていた。

先導の警官が我々に「お前達その場で停れ、動くと射殺する」と威嚇され、慌てて睨まり戦慄を覚えた。

徹底した耐乏生活

復興作業の木材は殆ど現場での手造りで、角材は長さ三〜四メートルの原木丸太を鋸で荒削りし、小物材は無節の生丸太を三角型断面に縦割し、年輪に沿って刃物で引き裂いて作った。

また労働者の昼食は配給券と引替えた一塊の黒パンと肉をかじる粗末なものだった。また老人達は長い時間かけて巻煙草を造り吸っていた。方法は、新聞紙を小さく折り目をつけてちぎり、粒状の煙草をのせ丸めながら舌で貼り、火打石の火花を綿に移す至って原始的なやり方で間に合せていた。

虎口を逃れてまた受難

ナホトカ港と引揚船

引揚列車が山間を抜けると眼下に大海原が開け、ナホトカ港の終着駅で全員降りた。

砂浜には赤旗が林立し、数万の引揚同胞で沸き返っていた。引揚業務はソ連中流階級を思わせる服装の「共産同盟青年行動隊」の腕章を着けた日本人が当たっていた。

引揚船の入港を待った人達は「スターリン讃歌」や「旧軍閥を暴く人民裁判」で氣勢をあげていたが、しかし怪情報を得て新たな対応に迫られ、愕然とした。

それはアクチーブ行動隊員が、在ソ中の共産思想意識調査をし、その結果で乗船可否を決めるといふ醜い話だ。早速皆で鳩首相談し、菅原さんという人が学生時代にマルクス主義思想を研究されたそうで万事お任せした。

果せるかな若いアクチーブが来て「共産思想を学んでのソ連同盟の感想」など質問した。我々は頬被りを決め見守った。菅原先生の講義に彼は肯くのみで敬服し、お蔭で無事閥門を潜った。

一日千秋の思いで待ちに待った引揚船大郁丸が、日章旗を翻して接岸した。名前を呼ばれタラップを駆け登り、日赤看護婦さんが「お帰りなさい、お疲れさまでした」と労ってくれた感激と喜びは四十年経った今でも脳裏から離れない。

船内では真新しい毛布を被っている者、船倉にもたれ瞑想に耽っている者など暫くは平穩な船旅であった

が、日本海の荒波に呼応するかの如く船内も異様な気が漂い、いつしか静寂を破る革命歌「起て飢えたる者よ」大合唱と野次で騒然となった。

赤旗組

我々同志は、アメリカ占領軍と反動的日本政府の弾圧に苦しんでいる人民を解放し救うため敵前上陸する、ソ同盟で受けた好意と学習を生かし団結して戦おう。

日の丸組

我々はソ連で被った非人道的な屈辱を忘れず、無念に斃れた戦友の恨みを必ず晴らす。

船内放送

私達は貴方達を無事日本に帰還させるため迎えに来た厚生省の職員です。いま公海上を航行しています。乗組員も医療班もすべて日本人です。揭示してある船内規則を守って舞鶴港に上陸するまで静かにし指示に従ってください。

この切々と諭す放送に両陣営の強者達も嗚りをひそめた。

数日経ち船の揺れも治まり、遙か水平線上に祖国の

山々が浮び、陸地をはっきりと望んだとき、ほんとうに生きて運った」という実感が湧き涙に咽んだ。減速で湾内の美しい景観や無数の洞窟を見て、九年前に宇品港を目隠し同然で母国を離れた悲壮な気持とが交錯した。

米駐留軍の聴取

検疫、復員手続を済ませて旧海軍兵舎で寛いでいたら、米軍駐屯司令部から呼出され、日系二世が抑留中の事情を聞いた。

二世 「君がウファ收容所にいたとき戦車隊の作業に行っているが、ソ連軍隊長の階級氏名を言え」

私 「知らない」

彼は数枚の写真を見せて

二世 「これだろう」

私 「アーそうか」

それにしてもよく調べていると感心した

二世 「それではウファ市街地図を書け」

私 「そんなに自由の身では無かった、書けな

い」

二世 「今度帰った者米軍に協力しない、君も筋金入りの共産主義者か、そこで待っている」凄
い権幕で席を立った。

やはり噂通り米ソ冷戦の最中だった。何れにも加担しないと心に決めた。

今度は隊長室に呼ばれた。温顔の老大尉が流暢な日本語で

大尉 「長い間ご苦勞さまでした。私も日本軍の捕虜となり神戸で荷役作業をしました。ほんとうに辛いものでした、先程聞いていたウファの地図を書いてくれませんか」

私 「共産主義には同調しませんが、米軍のスパイでソ連に行った覚えはありません、断ります」

大尉 「そうですか、今の気持ちわかります、元氣な姿を家族に見せて下さい」

紳士的な言動に救われた気がした。出迎えた兄と妹に伴われ、九年振りに懐かしい我が家の玄関を跨ぎ、

五年近くも消息が知れず、まさかの生還に大勢の人達が喜んでくれた。

一か月ほど社会復帰に備え心身を癒していたとき、東京マッカーサー司令部から出頭命令の葉書が届いた。老母が「お前、もしか戦犯の取調べではないか」涙声で心配していた。

指定日に引揚援護局員と一緒に星条旗はためく司令部に入った。此処でも日系二世が聴いた。

二世 「貴方が舞鶴上陸時の書類が来ています。大分落着いたでしょう、ウファ市の略図を書いて呉れませんか」

私 「戦争はもうコリゴリです。米ソどちらにも協力する考えになりません」

二世 「帰還した人達の証言でソ連の事は全て判っています。ただ確かめるだけです。何でもよいです。書いて下さい。お願いです。私の務めも果たせません」

私 「そうですか、判りました書きましよう」
遠い殺風景な北欧の地に想いを馳せながら「空想に

も似た幻の市内見取図”を乱暴に書いて差し出した。彼は内容を調べもせず封筒に入れ、やっと放免され長かった軍隊生活に終りを告げ郷里に還った。

思えば二十代の青春は波瀾万丈に明け暮れた。二度と誤ちを繰り返さないために「戦争の悲惨さと歴史の真実を正しく後世に語り継ぐ」ことが生き残った証人の務めと信じている。

【執筆者の紹介】

昭和四十九年、九州佐賀県でシベリア抑留者の組織作りのノロシが拳がり、逐次全国に拡がった。昭和五十二年十一月二十一日、九都道府県代表者二十八名が東京都に集合し協議の結果、全国戦後強制抑留補償要求推進協議会が結成された。

島根県の場合、翌昭和五十三年二月四日、松江市に於いて結成大会が開催された。参加人員は五十五名と少人数であったが、直ちに県下各市町村在住の有志に働きかけ、精力的行動によりまたたく間に全県下に浸透し、一年目には二千五百六十二名の大世帯の組織結

成ができた。

昭和五十三年五月頃、松江市東長江町の松浦進さんが突然来宅され、会の目的主旨の説明があり入会の勧誘を受けた。

抑留中のつらい苦しかった当時の生活を話し合い、異境の地で死亡した戦友には気の毒ではあるが、お互いに九死に一生を得て無事帰国できたことをよろこび合った。

初対面であったが、抑留中の共通の話題に花が咲き、長年親交のあった知人の気持がした。早速入会手続をして今後の会の運営活動に協力を約束した。

松浦さんは、昭和二十四年七月に復員され、島根県経済農協連の一級建築士管理事務所所長として就職、定年退職後は大原郡大東町の上代工務店に再就職、専務として会社業績の向上に活躍されたと聞いています。現在は非常勤役員として在籍して居られます。

昭和五十三年の全抑協島根県連合会発足時から副会長として会の運営に精励されていましたが、平成四年度から県連合会会長並びに財団法人全抑協理事として

重責の遂行に尽力されています。

私は当初から、松浦会長を人格、識見共にすぐれ、リーダーシップの持主であると敬服しています。

松浦家は代々続いた素封家で、進さんは地元でも人望があり、現在、神社の責任役員、町内老人会会長等の要職に就いて地域発展のために寄与されています。

(島根県 本田 吉則)

シベリア抑留と吾が人生

新潟県 高橋 吉郎

仏教の教えでは、人間には前世と後世、現世とがあり、前世に悪いことをしていると現世には苦しまなければならぬといひ、現世に良いことをしていると後世には福楽浄土に行けると教えている。人間はすべて運命づけられているといふ。

私は、前世に余程悪い事をしていたと見えて、現世には地獄でもあれ程の苦しみはないであろうと思う程